

月刊 En-ichi 圓一

4  
no.263

# 魂の教育を実践する

インタビュー

## 「魂のミッション」に目覚める者となろう

明治大学教授 諸富祥彦



日本の家庭を守る教育情報誌

今月の  
焦点

人間は、「私の人生はこのためであったのだ」「これをするために私は生まれてきたのだ」という、自分のミッションに気付く瞬間がある。これを見つけることができたとき、人は初めて自分の人生を心の底から肯定できるようになるのではないか。

「魂のミッション」に目覚める者となろう 諸富祥彦…8

子育て新システムと民法改正が実現すれば、「家族あつての子育て」という意識は薄れ、婚外子であるかどうかは問われなくなる。しかし、婚外子を含めて出生率を上げ、社会が子育てするという方法は、ロシア革命後のソ連で実験済みだ。

「総合こども園」がもたらす子育てのコンビニ化…10

「教える価値がより子供の将来・成功に結びつくこと。そして、その価値の深化に対し、数値など目に見える評価を出すことが必要」と見る。これが米国最大の公立チャーター制学校グループが行っている人格教育プロジェクトだ。

より実践的な内容目指す「人格教育」—米国の新しい潮流…16

3	巻頭言 精神性に気付いた日本人の進む道	(社)人間性復活運動本部理事長 三角正明
4	教育再生への課題と展望 誰にも「生きる意味と使命」がある 「魂のミッション」に目覚める者となろう	明治大学教授 諸富祥彦
10	家庭学 「総合こども園」がもたらす子育てのコンビニ化	
12	情報ファイル 児童虐待の被害児童、最多の398人 大学生の基礎的数学力低下が浮き彫り	
14	ワールドアフェアーズ より実践的な内容目指す「人格教育」—米国の新しい潮流	
17	コラム 日本人よ、「団結の力」を取り戻せ	筑波大学名誉教授 鈴木博雄
18	発言 学校教育の忘れもの —数学者ガロアの生涯	哲学者 河端春雄
20	子育ては絵本で大丈夫 「おしゃかさまのたんじょう日」一家の無病息災とこどもの成長を祈る	劇団天童／ 天童芸術学校代表 浜島代志子
21	教育情報 非出会い系サイト被害、初めて減少	ほか
22	Book Review / 読者の声	
24	歴史と伝統の探訪 日本の赤十字運動の先駆者 / 福岡・北海道	



(社)人間性復活運動本部 理事長  
三角正明

## 巻頭言



千年に一度という巨大地震による大津波を東北沿岸の人々の何人もが、小型ビデオカメラで必死に記録した。その現場映像に驚嘆しつつ、日本人は津波の実像を歴史上初めて地元の人々と共有することになった。抗すべくもない圧倒的な津波の力を目にするのは初めてだった。

そして、地震と津波による福島原発のメルトダウン事故。放射線被害からの避難と電力消費の否応ない制限。沿岸に並ぶ五十基以上もの原子炉。地震国である日本がなぜ原発をこれほど造ったのかと、日本人の目から大きな鱗が剥がれ落ちた。今までは、日本の現実が日本人に見えていなかったのである。

天罰と言った知事があった。発言には賛否両論あったが、いずれにしても大自然に生かされているという感謝を見失っていたこと、大自然を軽く見て、経済発展一本槍で走ってきた姿に、日本人はようやく気付かされたのである。

人命の犠牲は大きかったけれど、この大震災がなかったら、日本は何の反省も無くこれまでの生活を続けていただろう。原発も造り続けていただろう。このままで良いのか？という天からの厳しい心が迫る忠告と受け取ることができる。何が大切で、何が駄目なの

## 精神性に気付いた日本人の進む道

か、ひとごとでなく自分の問題として考える人が増えたと思う。その意味では、この災害は空前の被害を与えると同時に政治、行政、そして国民の在り方を問いつけることになった。

物質生活を追求するだけでは人間としての価値は低いままである。人として生きる上で、何が本当に正しいのかを考え、心の在り方に目を向けていくことが必要となる。精神性の重視に舵を切る時が来たのである。精神生活七割、物質生活三割くらいの気持ちで行くのが妥当ではないのか。

精神生活とは何か。自分の力だけで生きているのではないことに気が付く処からスタートするように思う。大自然の奥にある大きな意思を想定することが人間の土台を作るように思う。昔の人が、天地神明に恥じない生き方を目指したように、自己中心の考え方から多くの人のために動くという利他精神への転換が必要である。

世界第二位の経済力まで上りつめたものの、バブル崩壊後、凋落の憂き目を味わっている。栄枯盛衰は世の習いである。この中で焦らずに、過去の栄光を追うことなく、浮き沈みのない永続性のある着実な社会を目指したい。そのためには、目の前の繁栄を求めないこと。誰もが、人間としての向上を目指す性質（人間性）を持っていることを知って、それを発現させるべく生きていくことにしたい。

誰にも「生きる意味と使命」がある

# 「魂のミッシェン」に 目覚める者となろう

私たちは「今この一瞬一瞬に心を含めて生きること」の大切さを学んだ。そして、この国全体が大きな祈りに包まれた体験は、消え去ることはない。

## 今この一瞬一瞬に 心を含めて生きる

——東日本大震災から一年が経ちましたが、ご著書『9つのライフ・レッスン』3・11で学んだ人生で一番大切なこと『実務教育出版』で、「明日死ぬかもしれない」「人生最後の日かもしれない」という思いで生きることが大切と語っておられます。大人はもちろんのこと、子どもたちにとっても重要なメッセージだと思いますが、これを家庭や学校で子どもたちにもどのように伝えたいと考えられますか。

今は家庭でも学校でも、「将来のために努力しなさい」と言います。しかし、それは少し違うのではないかと思います。

これは「今という瞬間を未来という幻想のために犠牲にする」生き方ではないでしょうか。これを善き生き方として教える親が多いですね。そうすると特に真面目な人であればあるほど、今この瞬間を生きるにはいけないのだ、将来のために今を犠牲にしなければならぬのだという思いに陥りやすい。カウンセリングに来られる人の中にも「今この瞬間を犠牲にしなければならぬ」という自己否定に苦しむ人が多いのです。

## 諸富祥彦

もろとみ・よしひこ  
明治大学教授

1963年福岡県生まれ。筑波大学大学院博士課程修了。英国イーストアングリア大学、米国トランスパーソナル心理学研究所客員研究員、千葉大学教育学部助教授を経て、現職。教育学博士。日本トランスパーソナル学会会長、日本カウンセリング学会理事、臨床心理士。著書に『9つのライフ・レッスン』『悲しみを忘れない』『自己成長の心理学』『生きづらい時代の幸福論』他多数。http://morotomi.net/



児童虐待事件

被害児童、最多の398人

虐待連鎖防止へ、家庭的環境での養育にシフト

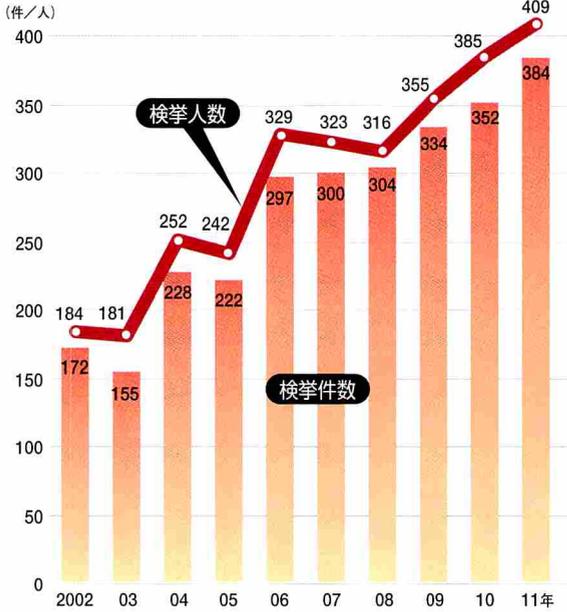
今年二月、母親の交際相手である男性（二七）の東京・新宿区の自宅で男性から虐待を受けた四歳児が病院搬送後、死亡するという事件が起きている。

また二〇一一年中に虐待によって死亡した児童数は六人増の三十九人に上った。虐待死亡事例の半数以上は児童相談所など行政が関わっていたが、防げなかった。

若年結婚・出産した未熟な親が、不安定な夫婦関係、脆弱な家族と地域のつながりのなかで、虐待を引き起こす場合が多い。

加害者自身が幼い時、虐待を受けているケースが見られる。現在、虐待などで親と暮らせない子供たちの九割は、児童養護施設などの施設で暮らす。虐待の連鎖を防ぐには、何よりも家庭的環境で愛され愛することを学ぶことが大切だ。従来の施設から里親・ファミリーホームなどの家庭的環境へシフトさせていく方向だが、里親女性による傷害致死事件が発覚するなど、課題も多い。

児童虐待事件の検挙件数と検挙人数



被害児童数



警察庁まとめ

未熟な親が子供に食事や水も与えず長期間放置、遺棄するなど、子供を死に至らせる残酷な虐待事件が後を絶たない。警察庁のまとめによると、二〇一一年の児童虐待事件検挙件数は前年比九・一％増の三百八十四件で、この十年で二二

倍に増加。検挙者は四百九人（同六・二％増）、事件に関わる被害児童数は三百九十八人（同一〇・六％増）で、いずれも統計を取り始めた一九九九年以降、最多となった。被害の内容は身体的虐待が二百七十件で全体の七割を占めたほか、

性的虐待が九十六件、ネグレクト（育児怠慢・拒否）が十七件、心理的虐待が一件。虐待の加害者は実父母が全体の六割を占めるが、「養育者」や「母親の内縁の夫」など、血縁者以外の男性による虐待が目立つ。

## 数学基本調査

大学生の数学力低下浮き彫り  
「論理性育む教育の充実を」

日本の大学進学率は五〇%を超え、「大学全入」の時代を迎えた。競争が緩和され、大学の共通課題

となつていのは大学授業の前提となる学力不足の問題だ。日本数学会が初めて行った「数学基本調



「論理性育む教育の充実を」では、改めて大学生の基礎的数学力の低下が浮き彫りになった。調査は昨年四月～七月、全国四十八大学の学生約六千人を対象に行われた。

それによると、小学生で学ぶ「平均」の考え方を大学生の二四％が理解せず、また中学生で学ぶ整数の理解を問う「偶数と奇数の和が奇数になる」証明を明快に記述できる学生は稀だったという。ただ国公立大学の偏差値別、学系別で見ると正答率にかなり大きな開きが見られた。

授業時間と内容が三割削減されたゆとり教育世代を中心に、論理的文章を理解する力、論理を組み立てて表現する力が失われていることへの危惧が今回の調査につながったという。

今、大学選抜方法は多様化、新

入生の半分は一般入試を経ない、アドミッション・オフィス（AO入試）や推薦などで入学している。さまざまな学力レベルの学生が一緒に学ぶ状況下、二〇〇〇年代から初年次補習授業を行う大学が増えてきた。同学会理事長の宮岡洋一（東京大学教授）は「ゆとり教育と学力試験を課さない推薦入試の拡大が学力低下に拍車を掛けた」と述べている。

日本数学会では「数学は科学・技術を支える基盤であり、数学教育が育む論理力は国際交渉でも不可欠」とし、「中等教育では証明問題を解かせる等、論理性を育む教育を充実させる」、「大学の数学入試問題はできるだけ記述式にする」とを提言している。

理数系研究者の層の薄さが指摘されるなか、科学技術立国日本を見据えた、理数科教育の充実が強く願われている。

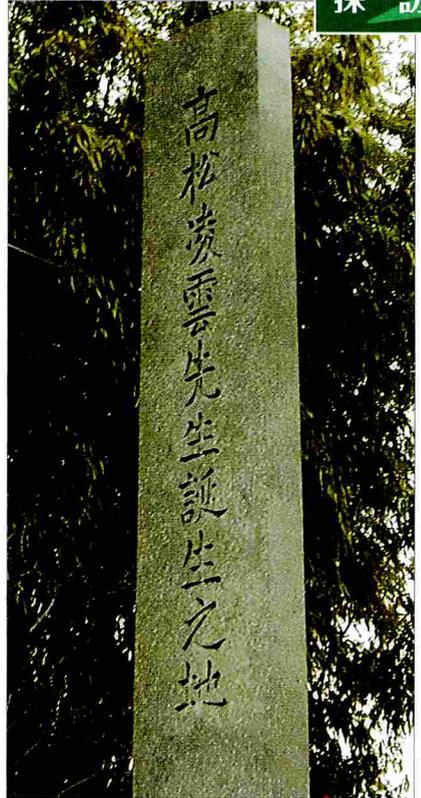
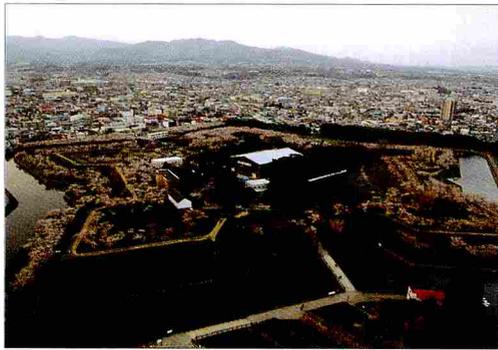


第3種郵便物認可  
2012年4月10日発行  
毎月10日発行・通巻263号

## 敵味方区別なく治療／福岡・北海道

歴史と  
伝統の  
探訪

(左上より時計回りに)高松凌雲(市立函館博物館蔵)、高松凌雲顕彰碑(福岡県小郡市)、五稜郭と函館市内(PIXTA)



江戸から明治への大転換の時代。新政府軍と旧幕府軍の戊辰戦争は、箱館戦争で決着しようとしていた。この箱館戦争に医師として参加した高松凌雲(一八三七〜一九一六)は、日本の赤十字運動の先駆者と言われている。

凌雲は、筑後国御原郡古飯村(現在の福岡県小郡市)に生まれた。医師を志し大阪の適塾に入塾、緒方洪庵の指導を受ける。そして語学に秀でた凌雲は、幕府から將軍徳川慶喜の奥詰医師に登用される。

一八六七年、幕府がパリ万国博覧会に参加する幕府代表団の随行医としてパリに渡り、そのまま留学。パリの病院(HOTEL-DIEU = 神の家)では、貧しい人たちに無料で診療が行われているのを見て、強い影響を受ける。

その後、日本では大政奉還、さらに新政府軍と旧幕府軍の戦争が

起こり、留学一年半で帰国。旧幕府軍に医師として参加する。

箱館病院の院長に就任した凌雲は、負傷者を敵味方区別なく治療した。凌雲の行動に最初は味方から反発もあったというが、凌雲はこれを一蹴。パリの「神の家」で見た診療精神を実行したのである。この行動は、日本の赤十字活動の始まりと言われる。新政府軍が病院に乱入した時も、身をもって負傷兵を守ったという。

箱館戦争が終わると、凌雲は新政府の誘いなどを全て断り、東京で開院。そして一八七九年、貧しい人々を無料で診療する「同愛社」を仲間と創設した。「自分が学んだものを天分として、すべての人ほどこす」(『箱館戦争銘々伝』新人物往来社)。この医療の本質は、まさに凌雲の人生そのものだったのである。目

2012

4

no.263

En-ichi

●発行所  
NCU-NEWS  
(東西南北統一運動国民連合)

〒160-0022  
東京都新宿区新宿5-13-2  
成約ビル2F  
TEL.03(5362)0631  
FAX.03(3354)5017  
E-mail news@en-ichi.org  
URL http://www.en-ichi.org

●発行人 渡辺久義  
京都大学名誉教授

定価 400円

[1年間5000円(送料込み)]

郵便振替番号  
00160-3-667291

●本誌に対するご意見、ご感想をお寄せください。  
●定期購読のお申し込みは、電話またはEメールでどうぞ。